

「見えない贈り物」

常葉大学附属橘高等学校 2年

「宮澤 莉子」

私の人差し指には小さなキズがある。これは小学生の頃遊んでいるときにガラスで手を怪我し、治療してできた手術痕だ。大量出血に加え血管、神経を切る大怪我、特別な手術が必要だと言われた私は市外の大きな病院で七時間に及ぶ大手術をした。その頃の私は大好きなピアノに熱中していたこともあり、もう二度とピアノを弾くことはできないかもしれないという恐怖に駆られ、手術費に入院費、通院費など多くかかったであろう費用のことは頭の片隅にもなかった。しかし高校生になった今、ふと指に残る傷を見たときに、あの指の怪我を今の元通りの指にするために一体いくらかかったのだろうかと思った。そこで母に聞いてみると、「難しい高度な手術だったから本当は何十万もかかるころだったけれど五百円で済んだんだよ。」と。意外な答えだった。調べてみると私の住む静岡県では子ども医療費助成制度があり、病気やケガなどで入院・通院したときの保険診療医療費の一部が助成されていることが分かった。そしてこれらは税金が財源となっていることを知った。私は税に支えられて生きているということを身をもって実感した。税のおかげで私は、傷跡さえあるものの普段通りの生活を送り、大好きなピアノも続けることができている。誰かが納めてくれたお金が形を変えて私を救ってくれた。なんだか目には見えないプレゼントを受け取ったかのように感じて嬉しくなった。

しかし、以前の私は納税に対してあまり良いイメージは無かった。なぜなら納税は国民の「義務」とされていて、大切なお金を搾取されているというイメージが頭のどこかにあったからだ。しかし、よく考えてみると医療や教育など多くの分野で私たちの生活は税金による恩恵を受けているということに気付かされた。私はその恩恵があることを当たり前にして過ぎてしまっていたからこのようなイメージを持ってしまっていたのだと思う。これでは誰かからもらったプレゼントをお礼も言わずに使っているようなものだ。税金に助けられて日常が送れているということを忘れてはならないと強く実感した。

私はいずれ社会人となって働く立場となり、所得税や住民税などを納めることになる。今の日本は高齢化が急速に進んでいるため二〇五〇年には現役世代一・三人で一人の六十五歳以上の方を支えなくてはならないと言われている。現役世代の負担の増加が見込まれるこれから生きていくためには多くの方が税金への関心を高め、真剣に向き合っていく必要があると思った。税金を納めるということ、それは送り先も贈るものも見えないけれど誰かに幸せをプレゼントするということ。私はこの考えを持って社会の一員として貢献できる大人になりたい。